

2010年11月19日

演習タイトル：Mirabib Hill Shelter archeological site visiting

講師：水野一晴

キーワード：Climate Change, Nomad, Sheep, Water fall, Cave

要約

砂漠の中にありながらかつて羊遊牧の休憩所として使用されていた洞窟を訪れた。1960年代に南アフリカ出身の女性研究者が発見した。強い砂嵐などを避けるために、羊飼いが休憩所として使用していたと言われている。

洞窟内の床は羊の糞が何層にも重なり固まっており、天井は焚き火による煤で黒ずんでいる。また、セラミックの陶器が発見されている。人骨は発見されておらず、遊牧の途中で一時的に滞在するための洞窟であったと考えられる。その羊の糞による床の年代測定により 450AD という値が出たことから、南部アフリカにおける家畜所有を示す最も古い遺跡の一つであることが考えられる。

壁面には、人と動物と思われる赤黒い塗料で描かれた壁画が観察できる。描かれた年代や塗料の種類は不明である。

現在、周辺地域は大変乾燥しており、羊の餌となるような植物はほとんど観察できない。この遺跡の存在は、当時この地域で羊遊牧が盛んであったことを示している、つまり、周辺の自然環境が湿潤な環境から乾燥地に変化したと推測することができる。

フィリピンでは、水牛、豚、鳥、ヤギ、羊など様々な種類の家畜を飼っている。山間部と沿岸部の自然環境と家畜の有無や種類を考察すると、相違が見られるのかという疑問を持った。

(報告者：吉澤あすな)